

## 第Ⅱ部 草津市編

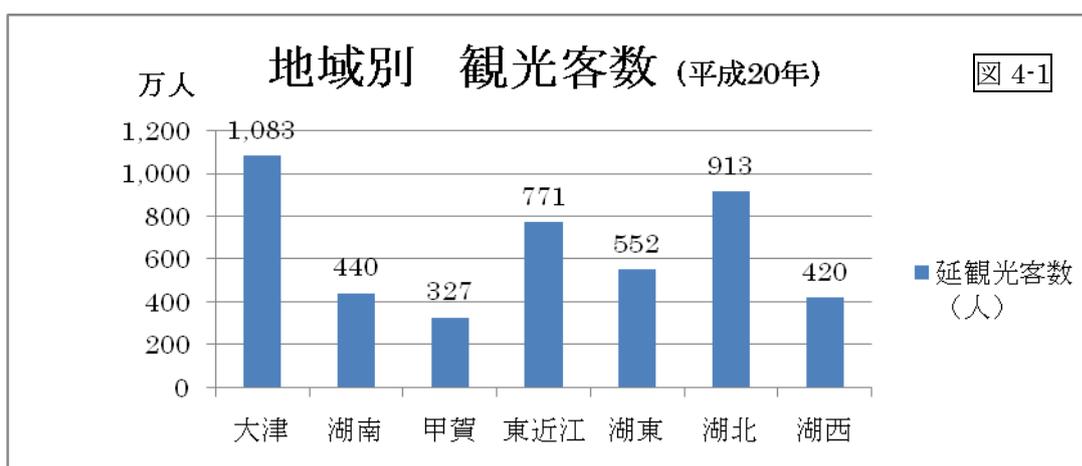
さて、この着地型観光は、着地側の住民が地元を知ってもらおうという観点から企画されるため、単なる観光施策としてのみ捉えるのではなく、「まちづくり」の視点とそれを支える多様な地域の人材確保が重要となる。また、着地型の観光を実践するための前提として、フィールドとなる草津のまちについての現状把握も欠かせない。そのような視点に注意しながら、観光まちづくりの草津市編であるⅡ部へ進む。

### 第1章 草津市観光の現状と課題

#### 第1節 草津市観光の現状

##### 1 県および市の地域別観光入込客数

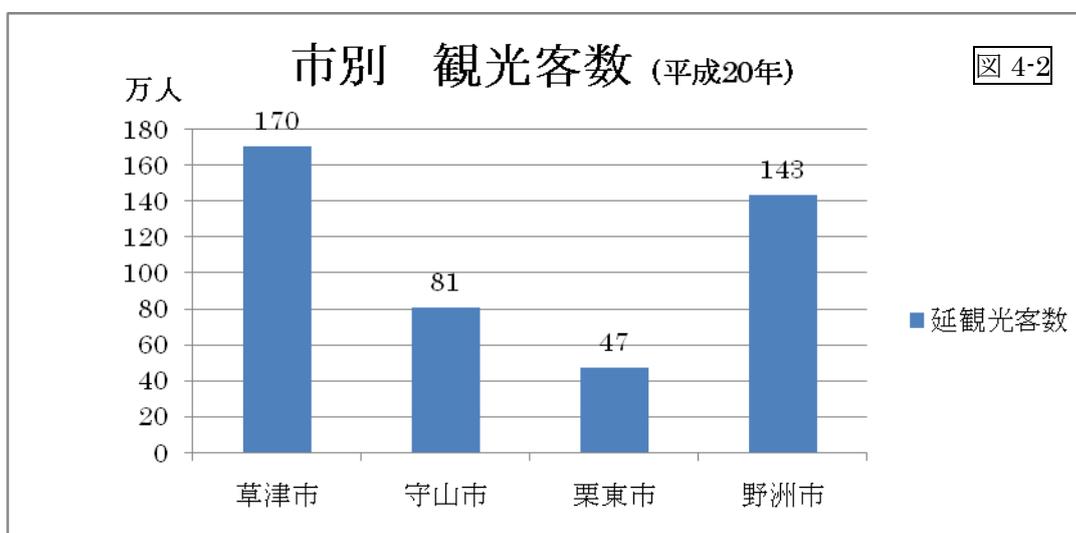
平成20年度の滋賀県全体の観光入込客数は、45,072,300人であったが、これを地域別統計でみる。



(出典)図 4-1:滋賀県 平成20年滋賀県観光入込客統計調査書より

多くの観光客を集めている大津や湖北と比べると、湖南の観光客数は際立って低い数値にある。このことから、湖南地域は滋賀における観光地ではないことが明かではあるものの、滋賀全体の観光入込客（45,072,300人）に対して、本市が位置する湖南地域の観光入込客数は4,402,800人で、9.8%を占めている。

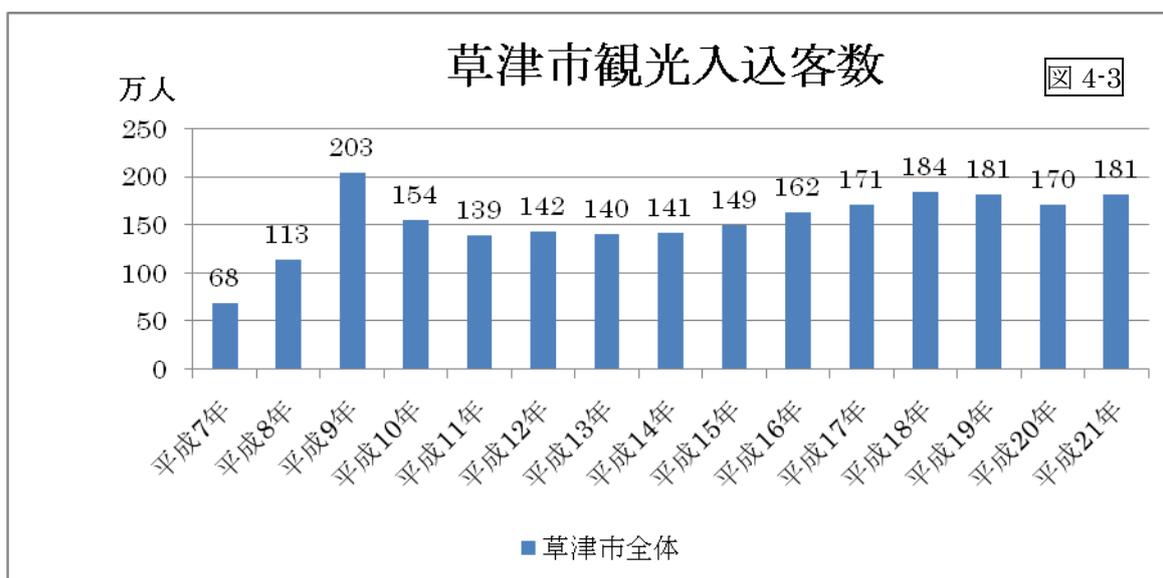
次に、湖南地域の観光入込客数を、市別統計でみる。



(出典)図 4-2:滋賀県 平成 20 年滋賀県観光入込客統計調査書より

湖南地域の観光入込客数(4,402,800人)に対して、草津市の観光入込客数は1,700,800人で、38.6%を占めている。滋賀全体における本市の位置づけとしては、いわゆる観光地ではないが、湖南地域のなかでは最も観光客を集めていることがわかる。

## 2 草津市の観光入込客数



(出典)図 4-3:草津市 商業観光課 提供資料より

草津宿本陣の一般公開や水生植物公園みずの森の開園など、本市の“観光元年”である平成8年を挟み、平成7年には68万人に過ぎなかった観光客数が、平成9年には

203万人にまで大幅に増加していた。その後、緩やかに増減を繰り返し、平成21年には1,812,100人と、過去3番目の観光入込客数となっており、草津市へのビジターの流入は、市の人口120,632人に対して15倍に相当していることがわかる。

### 3 県および草津市の目的別入込客

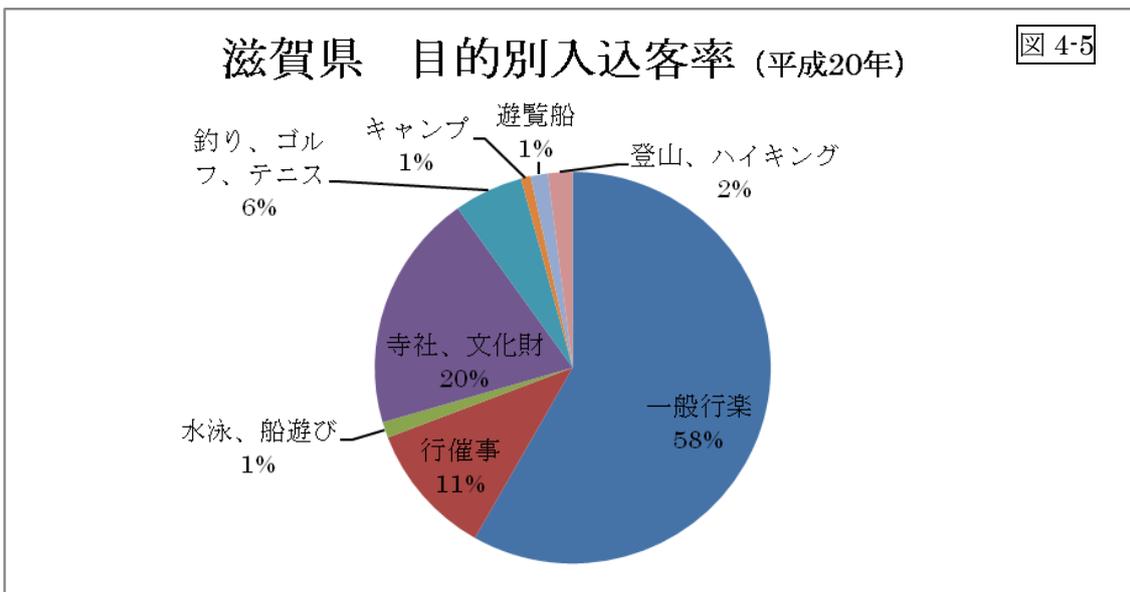
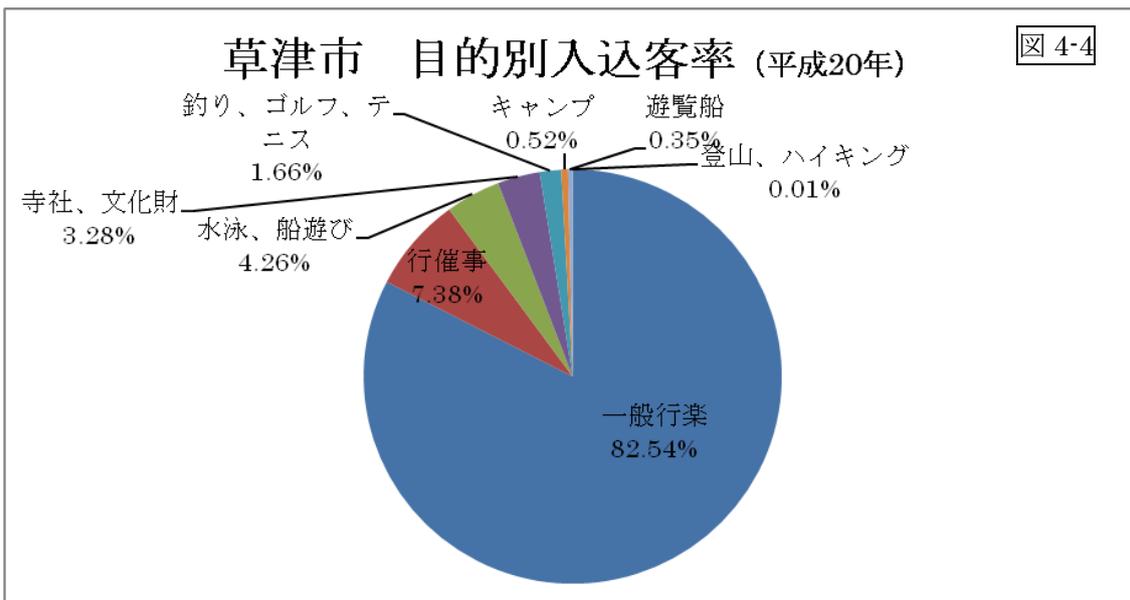


表3 滋賀県観光入込客数ベスト30(平成20年)

順位	観光地名	市町名	入込客数 (人)
1	黒壁ガラス館	長浜市	1,937,500
2	多賀大社	多賀町	1,689,800
3	希望ヶ丘文化公園	野洲市,湖南市, 竜王町	727,000
4	比叡山ドライブウェイ	大津市	726,000
5	藤樹の里あどがわ(道の駅)	高島市	700,400
6	伊吹の里(道の駅)	米原市	645,900
7	彦根城	彦根市	645,600
8	竜王鏡の里(道の駅)	竜王町	609,500
9	八幡掘	近江八幡市	595,200
10	日牟礼八幡宮	近江八幡市	586,400
11	長浜オルゴール館	長浜市	546,100
12	延暦寺	大津市	533,300
13	豊公園	長浜市	528,200
14	みずどりステーション(道の駅)	湖北町	527,100
15	びわ湖大橋米プラザ(道の駅)	大津市	496,000
16	奥比叡ドライブウェイ	大津市	428,000
17	琵琶湖ホテル	大津市	425,400
18	滋賀県立琵琶湖博物館	草津市	416,600
19	びわ湖鮎家の郷	野洲市	404,500
20	くつき新本陣(道の駅)	高島市	369,700
21	近江神宮	大津市	366,000
22	びわ湖大花火大会	大津市	350,000
23	あいとうマーガレットステーション(道の駅)	東近江市	346,300
24	あがりゃんせ(スパリゾート雄琴)	大津市	344,700
25	アグリパーク竜王	竜王町	325,300
26	滋賀県立陶芸の森	甲賀市	317,500
27	夢京橋キャッスルロード	彦根市	316,000
28	マキノ高原	高島市	307,500
29	グリーンプラザからすま(道の駅)	草津市	303,700
30	滋賀農業公園ブルーメの丘	日野町	302,700

(出典)図 4-4,4-5,表 3:滋賀県 平成20年滋賀県観光入込客統計調査書より

図 4-4 の目的別入込客率では、一般行楽<sup>28</sup>が 82%と最も多く、以下、行催事、水泳・船遊び、寺社・文化財と続く。図 4-5 で示した滋賀全体のそれと比べると、一般行楽の占める割合が特に高いこと、寺社・文化財の割合が低いこと、などが特徴として挙げられる。

また、表 3 について、滋賀県全体において入込客数を集めた観光地の順位のうち、長浜市の黒壁ガラス館が 1 位に、また近江八幡市の八幡堀が 9 位に位置している点が注目される。

長浜市の黒壁ガラス館については、第 I 部第 2 章第 3 節で述べたことから分かるように、「ガラス」を新たなまちおこしのテーマとして創造するという、市民によるまちづくり型の地域振興策だといえる。近江八幡市の八幡堀も同様、近江八幡観光物産協会によると、「近江八幡青年会議所が「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」を合い言葉に全市民へ浚渫と復元を呼びかけました。これは、「観光目的ではなく、今現在、我々が存在するのも八幡堀があったからであり、まちの歴史が詰まった堀を守らなければならない」という思いから<sup>29</sup>」、八幡堀の保存・活用によるまちづくりが進められ、今では滋賀県を代表する観光地となっている。このように、観光まちづくり型の取組によって多くの交流人口を集めることは十分に可能であることが分かる。

---

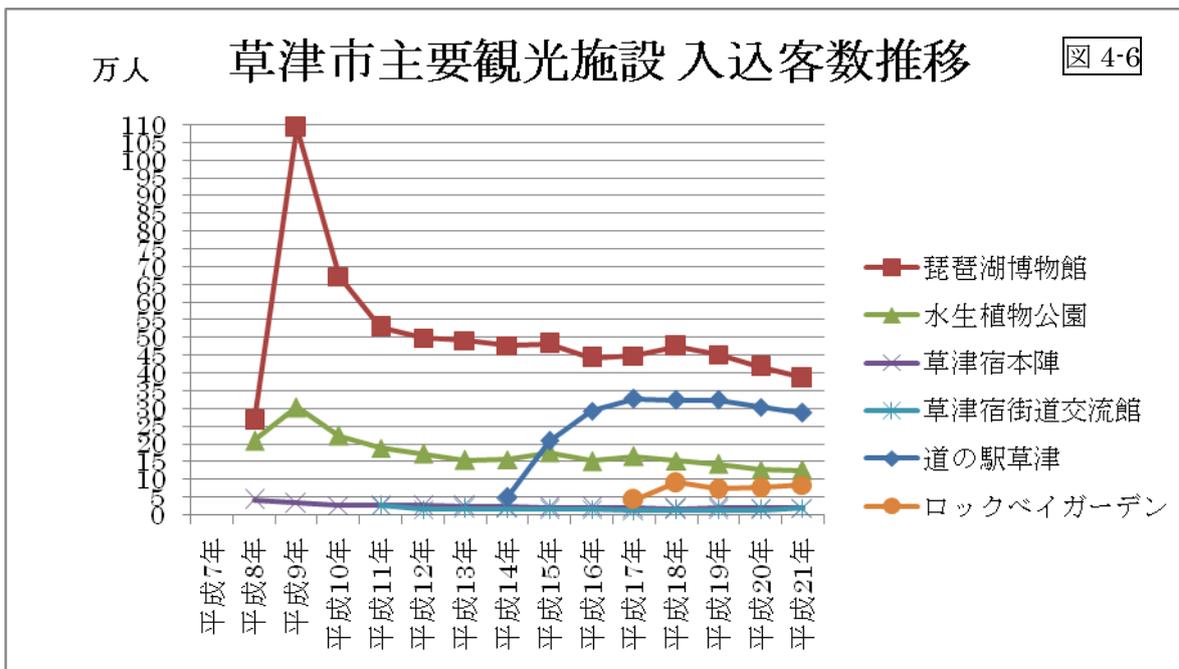
<sup>28</sup> 一般行楽とは主に、観光施設や道の駅といった物見遊山的な目的で訪れた客層を指す。

<sup>29</sup> 近江八幡観光物産協会 HP「八幡堀～八幡堀とその歴史について～」

[http://www.omi8.com/annai/hachimanbori\\_info.htm](http://www.omi8.com/annai/hachimanbori_info.htm) より 2010 年 12 月 13 日。

#### 4 市内主要観光関連施設

草津市内の主要な観光関連施設として、「琵琶湖博物館」「水生植物公園みずの森」「草津宿本陣」「草津宿街道交流館」「道の駅 草津」「ロックベイガーデン」が挙げられる。これらの施設は、どの程度、ビジターを集められているのだろうか。



(出典)図 4-6:草津市商業観光課 提供資料より

平成 21 年度では、多い順に琵琶湖博物館が 38.5 万人、道の駅草津が 28.6 万人、水生植物公園が 12.5 万人、ロックベイガーデンが 8.2 万人、草津宿街道交流館が 1.89 万人、草津宿本陣が 1.81 万人となっている。

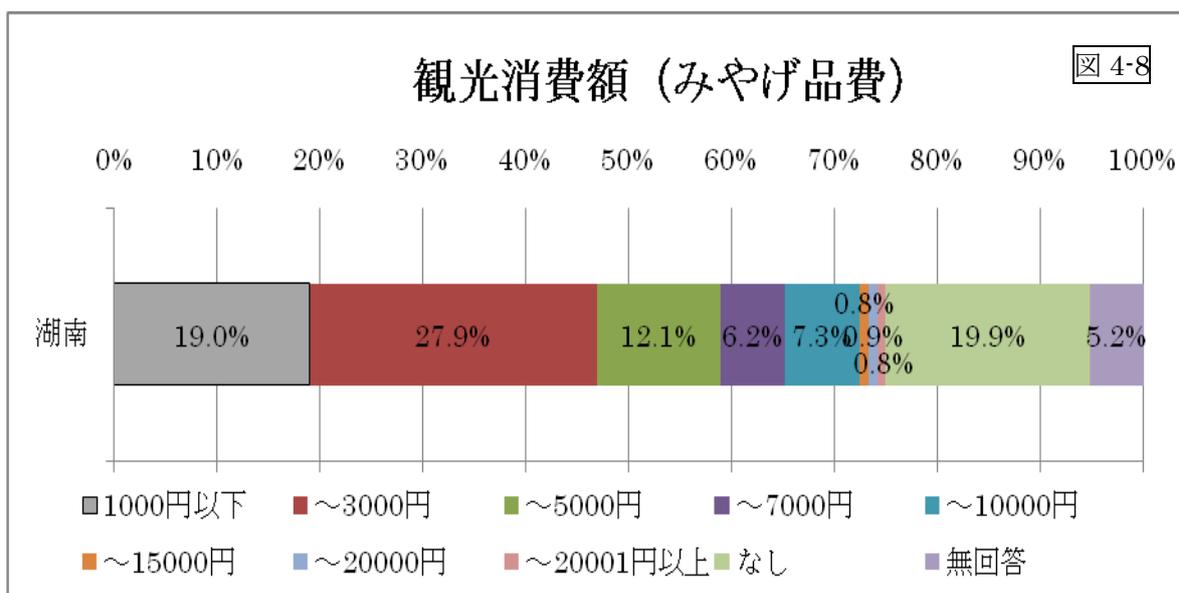
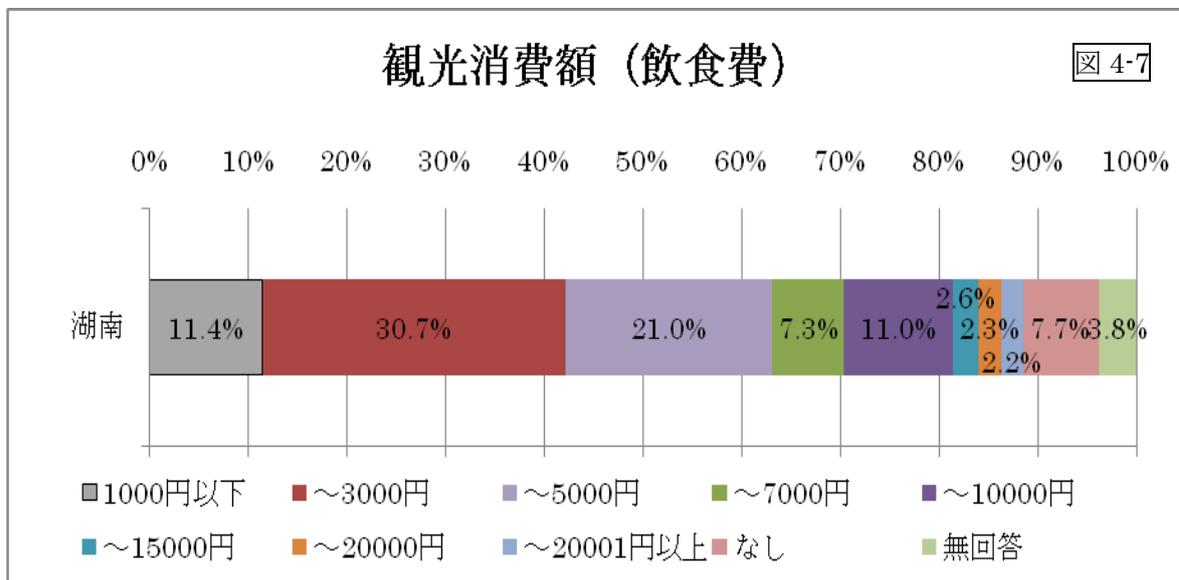
図 4-6 をみると、図 4-3 で示した平成 9 年度に草津市観光入込客数が大幅に増加した主因が、やはり烏丸半島に立地する「琵琶湖博物館」と「水生植物公園」にあったことがわかる。平成 21 年度比較で、図 4-6 で示した主要観光施設の入込客数の合計人数が 916,800 人で、草津市全体の入込客数が 1,812,100 人に対しておよそ 50%を占めている。そういった意味で観光型の施設を設置することは、観光客を呼び込むための一つの有効な手段であったとはいえる。しかし、それ以後の両施設の入込客数の推移をみると、いずれも右肩下がりの傾向にある。

「草津宿本陣」と「草津宿街道交流館」については、低い数値が目立っている。両施設は市内中心部に位置するにも関わらず、客数が低いということは、観光客を市内中心部に呼び込めていないということでもある。

一つ注目できることは、観光施設のなかでもグリーンプラザからすま（道の駅草津とロックベイガーデンから構成される）は、地域の特産品の販売拠点であり、また体験農

業といった新しい取組を行っており客数をみても水生植物公園を超える奮闘が伺える。

## 5 観光消費額



(出典)図 4-7,4-8:滋賀県「観光動態調査」より

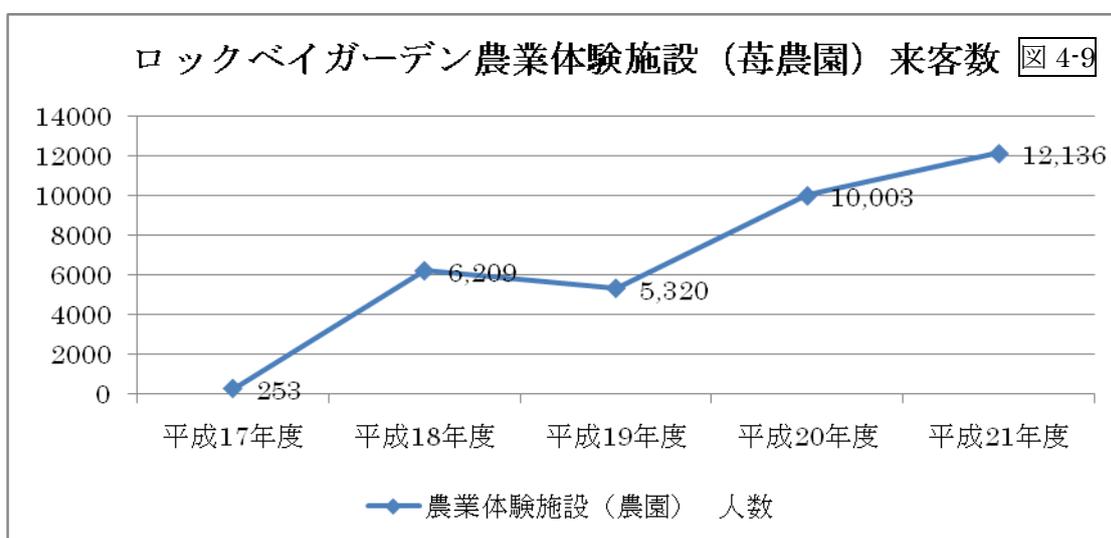
本市が位置する湖南地域への来訪者が消費する飲食費とみやげ品費は、ともに「3000円以下」の割合がおおよそ3割と最も高く、またみやげ品費については「なし」とする層が2割存在するなど、総じて観光消費額は低額にとどまっている。観光施設による観光客を一定集客してはいるものの、地域への還元が不十分であることがわかる。

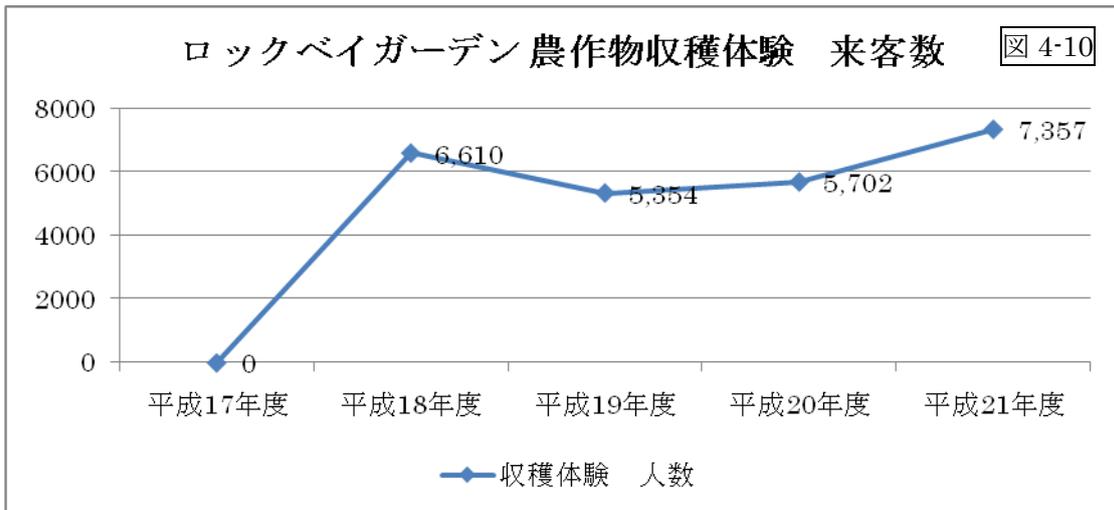
## 6 グリーンプラザからすま

グリーンプラザからすまのうち、「道の駅草津」では、農業生産法人である（株）からすま農産の運営のもと、地元で採れた野菜や米などを直売し、レストランでは地元野菜を用いた「食採ランチ」を提供するなど、地産地消を実践している。当施設の支配人へのヒアリング調査では、来客者のうち、約40%は県外からの来客であるという。データこそないものの、無料で実施している「レンタサイクル」申込用紙などから、特に大阪、京都、奈良などから多くの客が訪れていることが判明している。また、県外からの来客が一定数ある理由の一つに、「道の駅マニア」が全国から集まってくるからだという。

他方、グリーンプラザからすまのガーデン事業部として体験型農園を運営している施設に、「道の駅草津」に隣接した「ロックベイガーデン」がある。

このロックベイガーデンにおいて、少量土耕栽培方式のいちご摘み取りが体験できるという、いわゆる“イチゴ狩り”を楽しめる「*ROCK BAY STRABERRY FIELDS*」と、季節の野菜や果物を収穫体験ができる、いわゆる“体験型農園”の「*ROCK BAY FIELDS*」の体験者数の推移は次の通りである。





(出典)図 4-9,4-10: (有) からすま農産 ガーデン事業部 ROCK BAY GARDEN 提供資料より

農園による収穫体験は、その性格上、天候状態に大きく左右されるため安定した客数の確保は困難ではあるものの、平成 19 年度以降は増加傾向にあることがわかる。また、農業体験施設（苺農園）についても、平成 19 年度で一旦落ち込むものの、その後は来客数を増やしている。

観光型施設が軒並み右肩下がりのなか、農業・収穫体験の試みでもって一定の集客力がみられることは、地域産品や体験型観光への人々のニーズが確かに存在していることがわかる。

## 7 草津市観光の現状整理

まず、図 4-1 の地域別入込客数をみると、湖南地域は極めて低い数値であり、これは大津や湖北のように全国的に有名な観光名所が少ないためだと思われる。次に、図 4-2 にある湖南地域における入込客数をみると、草津は最上位に位置しており、湖南他市と比較して優位である理由は、草津には琵琶湖博物館・水生植物公園みずの森・草津宿本陣・草津宿街道交流館・道の駅草津・ロックベイガーデンといった集客施設が立地しており、減少傾向にあるとはいえ、一定の集客力を有しているからだといえる。平成 21 年度のわが市への入込客数は、主要観光施設だけで半数を占めている。また、図 4-4 で示したわが市の目的別入込客でも、一般行楽（観光施設への来館者等を含む）が 82% と多数を占めている。

このことから、わが市の観光入込客数は相当程度観光施設に依存していることが伺える。とはいえ滋賀県全体でみれば、わが市の入込客率はわずか 3.7% 程度であって観光での集客力は極めて低いという事実から、こうした観光施設でも十分な集客効果を果た

しているわけではない。また、図 4-7、4-8 の観光消費額をみると、地域に訪れる観光客による十分な地域経済への波及効果を果たせてはいないという課題も残る。

ところで、表 3 でみた長浜市の黒壁ガラス館と近江八幡市の八幡堀は、いずれも地域住民の自発的なまちづくり活動の一環として取り組まれてきた経緯がある。大資本による大型観光施設ではない、新しいかたちの観光地が多く観光客を集めることに成功していることは、昨今の観光客の観光に対するニーズの変化の表れだといえる。住民主体ではない官製の観光施設がメインの観光集客では、これからの観光客の消費動向やスリムな自治体運営の流れに沿わない。今後は、時代の流れ・観光客の特性に対応した住民によるまちづくり型の観光施策へのシフトが求められている。

## 第 2 節 草津市観光の課題

本市の観光には以上のような問題点があることが判明したが、それを踏まえて次のような課題がみえてくる。

- ・全国的な観光地でないことはもとより、滋賀県内の他地域と比較しても十分に集客できておらず、観光のできるまちという認知度は極めて低い。
- ・県内の他地域で見られるまちづくり型の観光地が多く観光客を集めることに成功しているのに対して、本市では、現在の入込客の多くを観光施設に依存しているが、そのいずれの施設においても集客数が減少傾向にある（グリーンプラザからすまの一部施設を除く）。
- ・本市に訪れる観光客を今日まで集めてきた観光施設の集客力が弱まってきたということは、すなわち、今後本市の交流人口が低下していくということである。従来とは異なる交流人口拡大策を考えていく必要がある。
- ・琵琶湖博物館などの集客施設は市中心部から離れた烏丸半島に集中していることから観光客の消費対象が限定され、また湖南地域の来訪者の低い観光消費額からも、十分な経済効果が地域にもたらされているとはいえない。

上記で示した課題に加えて、本市で着地型観光による交流人口拡大を検討する際に考慮すべき点としては、次のようになる。

- ・観光というアプローチで交流人口の拡大を目指すのであれば、これからの観光客の特性に対応するため、施設型・物見遊山型の従来の観光施策とは異なった、新たな観光スタイルを構築する必要があり、着地型観光はその一手法といえる。すなわち、官製ハコモノ型の観光集客に依存しない、住民主体の取組による新しい観光集客施策の推進が求められている。
- ・地域内での消費を促すために市中心街への交流人口の拡大を図る必要があるといえるが、この点、現状では市中心部への集客が不十分であり、中心部に位置する観光資源

のさらなる魅力開拓、また烏丸半島の交流人口を中心部に引き寄せる方策を考えることの意味は大きいといえる。

こうした本市が抱える問題点を踏まえ、草津のまちにおける交流人口の拡大策についての検討を行っていく。